The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	スコット・クック先生講演会　報告
Author(s)	湯浅, 邦弘
Citation	中国研究集刊. 2007, 43, p. 110-113
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/61190
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中国研究集刊 為号（総四十三号）平成十九年六月 一一〇―一一三頁

スコット・クック先生講演会 報告

戦国楚簡研究会

新出土の古代文献が中国思想史を大きく書き換えようとしている。その研究の世界的な広がりを象徴するのが、スコット・クック（Scott Cook 顧史考）氏の活躍である。クック氏は、一九六四年生まれ。アメリカのミシガン大学を修了した後、同大学助理教授などを経て、現在、アイオワ州のグリネル大学（Grinnell College）東亜語言文学系の副教授。一九九五年に、博士論文《Unity and Diversity in the Musical Thought of Warring States China》を発表。その後、新出楚簡、特に郭店楚簡に関する研究を精力的に進め、『郭店楚簡先秦儒書宏微観』（二〇〇六年、台湾・学生書局）を刊行した。

クック氏の存在を我々が知ったのは、二〇〇三年十二月、台湾大学で開催された国際学術交流会議「日本漢学的中国哲学研究与郭店・上海竹簡資料」の席上であった。当時クック氏は、台湾の中央研究院中国文哲研究所の訪問学人として台湾に在籍していたのである。その後、二〇〇四年三月に大阪大学で行われた国際シンポジウム「戦国楚簡と中国思想史研究」に、クック氏は、台湾大学・東呉大学を初めとする当地の研究者とともに来日した。「先秦出土文獻與傳世經典的對照及有關的問題」と題する研究発表を流暢な中国語で行い、大いに驚かされた記憶がある。

それから三年。クック氏の来日に合わせて、大阪大学での講演会を企画した。我々戦国楚簡研究会は、現在、日本学術振興会科学研究費の支援を得て戦国楚簡の共同研究を推進しており、年に四～五回程度の国内研究会合を行っているが、その第三十二回研究会をクック氏の特別講演会としたのである。

桜の開花間近となった三月二十四日、大阪大学文学部

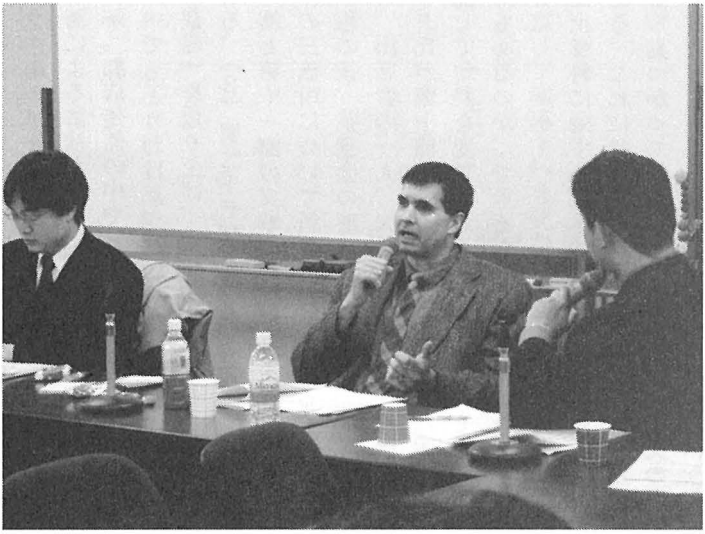
を会場に、講演会が開催された。初めに、戦国楚簡研究会を代表して、東北大学の浅野裕一教授から開会の挨拶とクック氏の紹介があり、続いて約一時間、クック氏の中国語による講演があった。演題は、「郭店楚簡〈語叢四〉篇新解」。郭店楚簡の中で特異な資料とされている『語叢』。その中でもとりわけ思想的に異質であるとの指摘がある『語叢四』を取り上げ、（1）第六簡と第二十六簡を接続させる、（2）第二十七簡と第七簡を接続させる、（3）第十簡と第十一簡の文章の句読符号を変更するなど、その内の三箇所について新解釈を提起するものであった。

休憩の後、茶話会の形式で約一時間、質疑応答が行われた。出席者の一人、大阪産業大学の大川俊隆教授は、クック氏が第十簡と第十一簡の句読符号に誤りがあると指摘して句読を変更したことに対して、そうした用例は他にもあるのか、できるだけ（句読符号を含めた）原典を尊重して解釈すべきではないか、と質問した。これは、新出土資料に対する基本的な研究の方法論を質したものである。これに対して、クック氏は、同様の用例は残念ながら見つかっていないが、当該箇所は原文のままで解釈するには問題があり、書写時点の誤りという可能性は十分に考えられる、解釈の一つの可能性として考えていただきたい、と回答した。

また、鹿児島大学の末永高康助教授は、クック氏が押韻に注目して『語叢四』の新解釈を提示していることを評価したい、との感想を述べた。これに関連して、広島大学の橋本敬司助教授は、中国古典における「口伝」に注目する立場から、当初口伝されていたものが、どのように文字化されていったのか、クック氏が指摘した『語叢四』の押韻と口伝とには何か関係があるのかと質問した。これに対して、クック氏は、明確には分からないが、押韻は記録しやすく残りやすい性質がある、と回答した。

一方、戦国楚簡研究会からは、浅野裕一教授が、第十簡と第十一簡にまたがる「匹婦愚夫不知其郷之小人君子。食薤悪知終其葉」について、「小」の右下に見られる合文号を同時に重文号とみなし、「匹婦愚夫不知其郷之小人君子。小人食薤悪知終其葉」と読めないか。つまり、匹婦愚夫に人を見る目が欠けていて、郷里に住む小人と君子の判別がつかず、また小人には今しか見えず、将来を予見できないという意味に解釈できないか、と新たな提案をした。クック氏は、これで問題が解決できるかもしれないと答えた。

また、島根大学の福田哲之教授は書法の立場から、クック氏の（1）と（2）の新解釈を支持した。つまり、第六簡と第七簡、第二十六簡と第二十七簡は、それぞれ



スコット・クック先生（中央）

出席者集合写真

の筆画の太さが不自然に異なるのに対し、クック氏が提起する第六簡と第二十六簡、第二十七簡と第七簡の連接案によれば、それぞれの筆画の太さが合致して筆脈がきわめて自然であることを指摘し、クック氏の見解は書法面からも傍証されるとしたのである。

このように、質疑応答は、極めて充実した内容であり、クック氏も出席者も、『語叢四』および新出土資料の研究全般について知見を深めることができた。

クック氏によれば、アメリカにおける新出土資料の研究者は、さほど多くはないものの、金文資料や竹簡資料は大いに注目されているそうである。確かに、新出土資料の研究は、中国大陸や台湾の研究者の数が圧倒的に多い。しかし、諸外国には、先鋭な研究を発表している学者がいることも、また確かな事実である。

我々戦国楚簡研究会では、今後も、こうした世界の研究者との国際交流を積極的に進めて行きたいと考えている。

なお、当日の出席者は十八名、時間は午後二時から四時、会場は大阪大学文学部中庭会議室であった。

（湯浅邦弘）